

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 渡邊 誠

本論文は、時間の概念が人間においてどのようにして生まれたはずかを丹念に辿り、かつ、時間について論じた西洋の代表的哲学者たちの議論の構造を分析し、最後に、暮らしの中で人々は時間とどのように関わってきたか振り返る試みをしたものである。それぞれ、第一部、二部、三部を構成する。

第一部は、時間とは、それ自体が言葉に支えられて初めて成立した概念でしかない出来事群を、今一度隠喩という高度な言語能力を駆使することによって物のように見立てて一本の道の上に序列化して並べることでつくられた概念であることを論じる。要点は次の三点にまとめられる。物の実在性は物の空間性と不可分であるが出来事は空間規定をもたず物のような実在性をもたない概念であること、しかしながら出来事概念は人々が共同・協働生活を営む上で共有することが必要な概念で言葉によるコミュニケーションとともに成立し、社会の秩序と同じような意味での存在性をもつこと、そして、出来事を言葉の力で比喩的に物のように扱いそれに空間性を宛がうところに時間概念が成立するということ。第一章は出来事概念が物とは違って確定性をもたず、語られることで輪郭づけられるものであることを示す。第二章は隠喩で語られる時間を主題にし、時間の方向性と未来・現在・過去という様相とをどう理解すべきかを論じる。第三章は、生物が太陽の動きと同調することで生きていることを確認した後で、人間という生物が、自分たちの生活に絶大な影響を及ぼす太陽を仰ぎ見ることで、結果的に、地点を時点の概念へと結びつけつつ計測される時間の概念を手に入れたに違いないことを論じる。第四章は、さまざまな境遇によって言葉の能力を十分にはもっていない人々の時間意識を、幼児の場合も含めて、彼等/彼女等についての幾つかの報告に則して検証することで、自説を補強している。

第二部は、七つの章を当てて、アリストテレス、アウグスティヌス、ベルクソン、フッサール、ジェイムズ、マクタガート、物理学の相対論の時間論を分析する。そして、それぞれの議論が前提しているものを掘り起こし、その前提ゆえに難点が生じていることを示す。

第三部は、第一章で文字をもたずに暮らすヌアの人々の素朴な時間概念を紹介し解釈したあと、第二章でギリシア、中世ヨーロッパ、第三章で近代産業社会における人々の時間との関わりを振り返り、第四章で、時間の中で人が生きるとはどのようなことかを、社会生活と自己のアイデンティティの獲得、更にはその崩壊のケースにも着目して、描きだしている。

以上のように、本論文は時間という扱いにくい主題を周到に論じ尽くそうとする野心的なものである。ただし、哲学者たちが時間について論じるとき、ターゲットが実在の概念にあった場合もあるのだという点には、最後に言及はするものの、この場合の哲学者たちの議論を尊重していない憾みがあり、これは本論文の主題と紙数の制約で仕方ないこととは言え一部の哲学史研究者たちからの反撥を招く可能性がある。だが、本論文は時間概念の内実について筋道の通った説得力ある見解を提示し、人々の新しい考察を呼び込むに違いない魅力を持ち、よって博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。